

「多様性の教育」に関する研究

小岩 大・荻野 聡・小林 拓哉・齋藤 貴博
杉坂 洋嗣・中野 未穂・八坂 弘

I 研究の背景と目的

現代は変化の激しい時代といわれる。そして今後、変化はさらに急速に進み、現存しない仕事に就いたり、技術を使ったり、これまで直面しなかったような問題を解決したりすることが求められるようになるという¹⁾。実際、今年度は、まさにそうした状況が現実のものとなり、先が見えない未来に対して、いかにして対応していくかが求められた一年となった。こうした先行き不透明で、予測困難な未来を生きる子どもたちに、我々はどうのような力を育んでいく必要があるのだろうか。

この問いに対し、本研究では、近年、多方面で盛んに議論されている「多様性」に着目している。その理由は次の3つである。

1つ目は、「多様性」に対応する力が変化の激しい未来において必要かつ主要な力と考えるからである。グローバル化や価値観の多様化が進むこれからの社会では、様々な文化や価値観、行動様式をもった人々と共生することが求められる。自分の価値観だけでなく、他者の価値観やその背景を踏まえながら、協働したり、問題を解決したりすることが必要になる。こうした多様性を前提とする社会において、どのような力が必要で、それをいかにして育むかを追究することは、重要な教育課題と考える。

2つ目は、竹早中学校がもともと多様性の土壌をもっているからである。例えば、生徒の出身小学校は、附属竹早小学校と附属大泉

小学校、外部の小学校と多様であり、その出身地も一都三県にまたがる。また、生徒の半分以上が卒業する竹早小学校では、小学校1年生から6年生までの縦割り班活動を伝統的に行っており、竹早小学校出身の生徒は、異学年の多様性の中で育ってきている。さらに、幼稚園と小学校、中学校が一つの敷地の中にある竹早地区では、長く幼小中連携教育研究に取り組んでおり、異校種の交流や合同授業を盛んに行うなど、多様な子どもと多様な学校文化の中でよりよい連携教育を研究してきた伝統もある²⁾。このように、竹早中学校は、多様な文化や経験をもった生徒が共生し、その中で創造され、受け継がれてきた文化と伝統の上に成り立っている。こうした特徴を活かすことで、より特色のある研究が展開できると考えた。

3つ目は、東京学芸大学との連携プロジェクトである。本校は、2017年度より東京学芸大学が自治体と附属学校と連携して進める「附属学校等と協働した教員養成系大学による『経済的に困難な家庭状況にある児童・生徒』へのパッケージ型支援に関する調査研究プロジェクト」に参画している³⁾。この目的は、深刻化する「子どもの貧困」問題を背景に、経済的に困難な状況にある児童・生徒を、教育の立場から支援する方策を開発することである。こうしたプロジェクトの中で、経済的多様性の側面から教育について考える機会に恵まれたことも、多様性に注目するきっかけとなっている。

以上を背景として、本研究の目的は、多様性の社会に対応できる生徒を育てるための授業づくりの視点とそれに基づく授業を開発することである。

II 研究の方法

この目的に対し、研究課題は次の3点に整理できる。

1つ目は、多様性に対応する力を育むための授業設計の視点を導出することである(課題1)。2つ目は、多様性に対応するためにはどのような力を育むことが必要か、その具体を明らかにすることである(課題2)。3つ目は、1つ目の課題で見出した視点をもとに、授業を開発することである(課題3)。

こうした課題に対し、次の研究方法をとる。課題1は、多様性に関する先行研究の文献解釈による理論的考察である。多様性に関するこれまでの一連の議論を検討し、先人の多様性の捉えから「多様性の教育」に関する基本枠組みを導出する。課題2は、先行研究の文献解釈による理論的考察と授業実践による実証的考察である。先行研究や教員の経験知に基づき、多様性に対応する力の具体を検討し、授業実践を通して実証する。課題3は、授業実践による実証的考察である。課題1で導出した「多様性の教育」の基本枠組みをもとに、課題2の理論的検討を通して挙げられた多様性に対応する力をねらいとした授業を構想実践し、その検証を通して授業開発につなげていく。

III 研究の経緯

1 めざす生徒像

「多様性の教育」を進めるにあたり、まず「多様性の教育」が何をめざすのか、その目標を検討した。目標は、教員間で具体的に共

有しやすくするために、多様性の教育が目標とする「生徒像」の形で設定した。設定された「生徒像」は、次の通りである。

他者との違いを価値あるものとして
理解し生かして、共生社会を創り続
ける生徒

多様性の文脈を基礎に、グローバル化の進展や society5.0⁴⁾、Education2030⁵⁾ の議論といった未来志向の観点をに入れて、研究部がたたき台をつくり、それを全教員で議論して設定されたものである。これは、今後の研究の進捗によっては精緻化する暫定的なものだが、「多様性の教育」はこうした生徒の育成を意図している。

2 「多様性の教育」の基本枠組み

「多様性の教育」の基本枠組みは、多様性の議論が最初に起こった企業経営の文脈と教育の文脈における多様性に関する先行研究の検討を通して設定された。

企業経営の文脈での多様性の議論をみると、社会の変化とともに、多様性に対する捉えも変容してきた様相が確認された。すなわち、「多様性を受容する」という考えから、価値あるものとして積極的に「多様性を活かす」という考えへの変容である。これは、多様性をマイナスのものとする見方から、社会の発展のために活かすべきプラスのものとする見方への発展である^{6) 7)}。「多様性」を意味するダイバーシティという言葉に、「包摂」「包含」を意味する「インクルージョン」という言葉が加わった「ダイバーシティ&インクルージョン」という言葉が生まれたことは、まさにこのことを象徴している。

他方、教育の文脈でも、「多様性を活かす」という考えはみられ、「子どものよりよい学び」のために多様性を積極的に活かそうという考えが確認できる^{8) 9)}。

以上の検討から、「多様性の教育」の基本的枠組みとして、「多様性を理解する」と「多様性を活かす」を設定している。前者は、多様性を理解することに焦点があり、多様性が学ぶ「対象」として位置づく。これに対し、後者は、教科の学びを深めるために多様性を活かすことに焦点があり、多様性が学びを深めるための「手段」として位置づく。

これらは、ややもすると「理解する」が先にあり、それから「活かす」という序列を想定させるが、そうではなく、両輪の関係として捉えている。多様性を「活かす」には「理解する」が必要になるであろうし、逆に「活かそう」とすることで「理解する」こともありうると考えられるからである。従って、授業づくりでは、便宜上、授業のねらいに応じてどちらかに重点を置くが、実際には両者が密接に関連していると考えられ、両方の視点から柔軟に実践を考えていくことが重要と考える。

3 「多様性を理解する」「多様性を活かす」授業像

設定した枠組み「多様性を理解する」「多様性を活かす」に基づく授業の具体的な姿を求め、研究部員のこれまでの授業実践を、各枠組みを視点に検討した。

検討対象となった実践事例は、「多様性を理解する」が社会科の難民問題に関する実践であり、「多様性を活かす」が国語科の小中合同による物語創作の実践である。これらの実践は、いずれも、もともと「多様性の教育」を意図して実践されたものではないが、多様性の要素を内在していると考えられたため、検討対象とした。

(1) 「多様性を理解する」実践の検討

検討した実践は、ヨーロッパの難民問題を扱った社会科の授業である。難民問題それ自体が人種、国籍、文化等の様々な多様性を含んでいるが、この授業のねらいは、「難民の

受け入れ」の問題の賛否を議論させることを通して、難民問題を多面的・多角的に考えさせることである。授業者に、この授業で理解させたい多様性は何かと問うと、「子どもがもつ考え・意見・立場の多様性」として特徴付けた。

検討では、多様な考えや立場の存在を知ることが生徒にとってどのような意味をもつのか、そもそも考えや立場の多様性を理解するとはどういうことかということが話題になった。これは、換言すれば、多様性の文脈でよく話題になる国籍や身体的特徴、LGBT等について、単にそういった事実があることを知れば、多様性を理解したことになるのかという問いである。

これについて、次のような議論があった。それは、こうした多様性に関わる問題の背景にある「多様性に対応する力」に眼を向けることが重要であり、その育成が「多様性を理解する」授業において真にねらうことではないかということである。そこで、授業者に、本授業での「多様性に対応する力」を特徴付けてもらったところ、「多様性の社会における生き方の戦略（ストラテジー）」と「共生的な態度（平和の視点）」が挙げられた。

将来、生徒が直面する社会は様々な多様性に溢れ、上述の国籍や身体的特徴、LGBTといった多様性に関わる全てのテーマを授業で扱うには限界があるだろう。とすると、様々な多様性の問題に対応できる核となる、ある種の汎用的な力を検討し、その育成を考えることが必要になってくる。

多様性の社会に対応するために必要な汎用的な力とは何か。またそれをどのように育むのか。「多様性を理解する」授業を構想する上で重要な視点であり、研究課題を見出すことができたといえる。

(2) 「多様性を活かす」実践の検討

検討した実践は、小中合同で行われた国語

科の授業である。小学校第2学年と中学校第1学年でグループを組み、1つの物語を創るという内容である。グループ活動では、小学生、中学生それぞれが創作する物語のアイデアを出すのだが、小学2年生の発想は、中学1年生の発想とはかけ離れており、いかにして小学生のアイデアを活かし、物語を創るかが、中学1年生にとって課題となった。

先述したように、「多様性を活かす」目的は「学びを深める」ことであり、「多様性」は学びを深める「手段」として位置づく。この視点からみると、本授業は、中学生1年生と小学2年生という異年齢に由来する「発想や考えの多様性」が物語創作に関わる生徒の「学びを深める」授業としてみることができる。実際、授業者によれば、小学生が入ることにより、中学生同士では出てこないような発想が入り、それをどのように活かすかを考える過程で、これまで以上の活発な議論や試行錯誤が起こり、物語創作を深めていったという。小学生の発想が、中学生に「それをいかにして物語に取り込むか」という課題を生み、その課題を解消する過程を通して学びを深めていったと考えられるのである。特に、小学2年生と中学1年生では年齢差が大きいため、発想の差も大きく、その差を埋めるのは大変だったが、その分生徒はよく考え、学びの深まりにつながったと授業者は述べる。「多様」といったときの異なりの程度が学びの深まりに影響しうることを示唆する指摘である。

本授業のこうした多様性を活かした学びの深まりを図に整理すると、図3になる。「中学生の考えA」は、「小学生の考え」を取り入れようとすることで、それを含むように考えを広げ、「中学生の考えA'」となる。この広がり「中学生の考え」の深まりである。

「多様性」が存在するということは、そこには「異なるもの」との比較がある。生徒は、

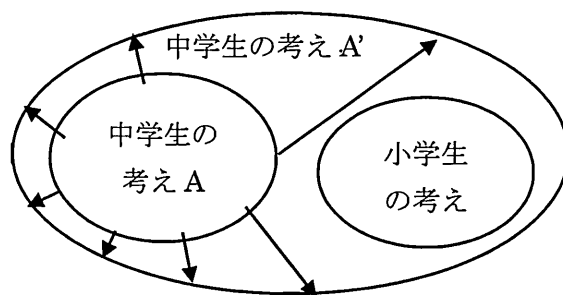


図3 他者の考えを包摂する学びの深まり

異なるものとの比較により、その共通点や相違点を見出しながら考えを深めていく。また、上記の実践では、異なる程度が学びの深まりに影響しうることも示唆された。こうしたことから、「多様性を活かす」授業づくりでは、どのような「異なるもの」を比較させ、それにより「どのように学びを深めるか」という視点が重要になることが示唆される。

Ⅲ 今年度の焦点

以上の研究経緯を受け、今年度は、次の2つのことに取り組んだ。

1つ目は、多様性に関する先行実践を、多様性の捉えと多様性をどのように授業で扱っているかに着目して検討することである。

2つ目は、「多様性を理解する」「多様性を活かす」の授業開発に取り組むとともに、それを通して、授業づくりの視点の精緻化と多様性に対応する力の検討を行うことである。全ての教科でこうした授業開発に取り組むが、今年度は、多様性の教育と親和性が高いと考えられる道徳に重きを置いている。

1つ目の取り組みの成果は、後掲の齋藤¹⁰⁾を、2つ目の取り組みの成果は、後掲の一連の実践研究を、それぞれ参照されたい。

Ⅳ 今年度の成果と今後の課題

今年度の成果は、次の2つにまとめられる。

1 つ目は、先行研究の検討を通して、本研究の特徴を確認するとともに、基本枠組み「多様性を理解する」「多様性を活かす」に基づく授業の構成及び検討の視点を導出したことである。

今年度検討した先行研究に限れば、文化や身体的特徴、LGBT などの社会的に問題とされている個々のテーマを扱った研究はみられるものの、これらを包括的に捉え、教育の文脈において「多様性」をどのように捉え、多様性が重視されていく社会を見すえてどのような教育をすべきかについて必ずしも十分に議論されていない現状が確認された。これに対し、本研究は、多様性の教育に対する一つの立場として「多様性を理解する」「多様性を活かす」を示し、それに基づく授業とそこでの生徒の様相を検討しているという点に、研究上の独自性と新規性があると考えている。実際、斎藤¹⁴⁾が示しているように、先行研究を「多様性を理解する」「多様性を活かす」の視点から見ると、多様性が学ぶ対象であったり、教科のねらいを深めるための手段であったりしており、それらの違いが必ずしも認識されていない現状が確認できる。多様性を授業にどのように位置づけ、生徒にどのような力を育むのか。本枠組みは、こうした授業のねらいに関わる授業づくりの基本的な視点になると考える。

一方で、課題もある。それは、本研究における「多様性」の捉えの明確化である。先行研究のように個々の特定のテーマに関する多様性ならば、その捉えはある程度定まってくるであろうが、本研究のように包括的な立場に立つとき、多様性をどのように捉えるかは、今後検討していく必要があろう。これについては、未来志向の教育全体の目標との関わりが深いと考えられるため、そうした観点からの検討も必要と考えられる。

2 つ目は、道徳を中心に多様性の授業と、

多様性に対応する力の具体をいくつか提案できたことである。こうした授業実践を蓄積していき、理論的に価値付けながら、実践をもとにした「多様性の教育」の理論を構築していくことが今後の課題となる。

引用・参考文献

- 1) OECD, 「OECD Education 2030 プロジェクト」
<https://www.oecd.org/education/2030/OECD-Education-2030-Position-Paper-Japanese.pdf> (最終確認日 2019 年 5 月 2 日)
- 2) 東京学芸大学竹早地区幼稚園・小学校・中学校, 『子どもが輝く一幼小中連携の教育が教えてくれたこと』, 2018, 東洋館出版社.
- 3) 東京学芸大学パッケージ型支援プロジェクト, 『附属学校等と協働した教員養成系大学による「経済的に困難な家庭状況にある児童・生徒」へのパッケージ型支援に関する調査研究プロジェクト 平成二十九年報告書』, 2018.
- 4) 内閣府「Society5.0—科学技術政策」
https://www8.cao.go.jp/cstp/society5_0/index.html. (最終確認日 2020 年 1 月 11 日)
- 5) 上掲書 1)
- 6) 谷口真美, 『ダイバシティ・マネジメント—多様性をいかす組織』, 2005, 白桃書房.
- 7) 荒金雅子, 『多様性を活かすダイバシティ経営 基礎編』, 2013, 日本規格協会.
- 8) 多田孝志, 『対話型授業の理論と実践—深い思考を生起させる 12 の要件』, 2018, 教育出版.
- 9) 伊井義人 編著, 『多様性を活かす教育を考える七つのヒント』, 2015, 共同文化社.
- 10) 斎藤貴博, 「多様性の教育」における先

行研究の検討，東京学芸大学附属竹早中
学校研究紀要 第 59 号, 2021, pp.47-52.

11) 上掲書 10)